

「幸せの国」の農業振興と観光開発

「世界一幸せな国」として、世界から関心が寄せられるブータン。日本は梅雨の真ただ中の6月、ヒマラヤ山脈を眼下に見下ろしながら、この国に降り立ったのはファッションモデルの押切もえさん。環境省が推進する「チャレンジ25キャンペーン」※1に参加した経験もある押切さんは、「環境は地球全体の問題。世界の人々がどのような現実で直面しているのか知りたい」と考えていた。そして今回、その思いがかなって「なんとかしなきゃ！プロジェクト」※2の著名人メンバーとしてブータンへの訪問が実現した。

1. ブータンの農業振興、農業機械化推進の拠点となっている施設で、日本も1960年代から支援を続けている。60年代にこの国に農業分野の専門家として派遣され、このセンター設立の礎を築いた日本人がいる。ブータンで外国人唯一の爵位「ダシヨ」を贈られた西岡京治さん。28年間にわたりブータンの農業振興に身をささげ、亡くなって20年経った今でも、ダシヨ「西岡」として地元の人々の記憶に深く刻まれている。この日、西岡さんから指導を受けたという、元センター所長のジャンベイ・ドルジさんに会うことができた。「私たちは、ダシヨ「西岡」から換金作物の栽培方法を学び、農家の生計向上につなげることができました」と懐かしそうに話してくれた。ブータンの農業の父と慕



特別レポート

文=登坂宗太(JICA広報室)
写真=丸山涼子(face to face)

押切もえさん
幸せの先に見えるもの
女性ファッション誌「AneCan」などでファッションモデルとして活躍する押切もえさん。今年6月、幸せの国ブータンで日本との間で築き上げられた「きずな」を見つけた。

in
ブータン



ボブジカ小中学校の生徒たち。「シャイだけど、みんななつこくてパワフル。将来の夢をきちんと持っているのは素晴らしいですね」と押切さん



[上]ダシヨ「西岡」の功績を称えて建立された仏塔の前で
[下]ドルジ元所長に農業にかける熱い思いについて聞いた

われてきた西岡さんの話を聞いた押切さんは、「日本人の大先輩がブータンと日本の懸け橋となってきたんですね」と感動していた。

ここで活動するのが、公益社団法人日本環境教育フォーラム(JEEF)。JICA草の根技術協力事業を通じて、地元NGOと協働で地域資源を活用した観光開発に取り組んでいる。「政府は観光を主要産業の一つとし、外国人観光客の増加を推進しています。でもボブジカのような小さな村は観光資源も少なく、地元にお金が落ちる仕組みがありませんでした」とプロジェクトマネージャーの田儀耕司さんは話す。そこで田儀さんたちが注目したのがこの土地に伝わる伝統衣装。「機織り体験を通じて観光客との交流を促進し、村が活性化するきっかけができれば」と熱く語ってくれた。



押切さんもブータンの民族衣装の機織りに挑戦。「一本一本の糸に情熱が込められているんですね」

ブータンで見つけた日本とのきずな
続いて、日本の支援で建設されたボブジカ小中学校へ。授業中、流ちょうな英



子どもたちに日本とブータンの「きずな」について説明する押切さん

語で発表する子どもたちに押切さんは驚いていた。「小さいころから英語を学んでいれば、世界中の人たちとコミュニケーションが取れるようになる。世界が広がりますよね」とリーラ・バハドゥー・タラ校長は説明してくれた。

「愛すべき日本の友人の来訪はいつでも歓迎」と、忙しい公務の間を縫って、あの優しい笑顔で押切さんを歓迎してくれたのだ。



「ブータンの首都は都市化の影響もあり、人々がお互いを敬い、支え合う精神が薄れてきている。でも私は、その精神こそ、守っていかなければならないと考えているのです」と国王陛下。「お互いを支え、敬うという文化を尊重するあなたたち日本人を愛している」と温かい言葉を押切さんはいいただいた。

ワンチュク国王・王妃両陛下、仁田知樹JICAブータン事務所長と。両陛下が京都で購入されたソルとカメの置物についてなど日本文化の話に花が咲いた

※1地球温暖化防止に向けて、温室効果ガス排出量の25%削減を達成するために具体的な行動を日本国内に普及していく活動。
※2途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクト。実行委員会は、NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)、JICA、国連開発計画(UNDP)。